



# CHAIN

No. 11



An Organ of Fib. Chem. Dept. '62-May

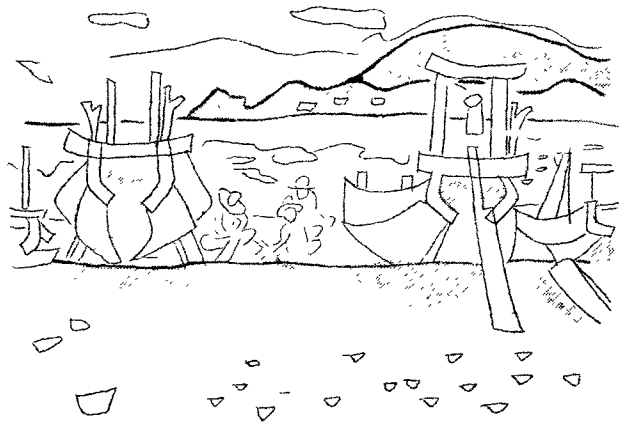
# 春

春が来たのです  
僕の小さな部屋にも  
春が来ました  
幼い頃ゆられて遊んだ  
ブランコのように  
僕の心もゆれるのです

時には大きく  
時には小さく

ある時は遠い海の青さをなつかしがり  
ある時は深い空に浮んだ雲を覚えて

窓の外では雨だれが歌っています。



新入生諸君へ	相宅 省吾	2
アルバイト考	4回生 寺田 英一	3
化学入門	1回生 中道 和也	5
オリエンテーションから	2回生 西沢 康雄	6
二週間で得た事	1回生 秋元 明	8
某月某日	3回生 金井 政洋	10
ニューヨークの真中でおにぎりを食べてみたい	1回生 宮崎 能久	13
婚約者	4回生 原 隼	15
交通七不思議	内野 規人	16
セクト主義	4回生 原 隼	17
思想・随想・幻想	3回生 金田 洋二	20
就職案内と先輩の行方	松本喜代一	25
研究室案内		31
編集後記		40

# 目次

◎ 大学創立以来ずっと学長をしておられた中沢良夫先生には5月末日の任期満了と共に勇退されることになりました。先日選挙の結果、次期学長には現工芸学部長の大倉三郎先生（建築工芸学教室）が当選され、来る6月1日に就任されます。なお任期は4年です。

# 新入生諸君へ

相宅省吾

晩春初夏の五月のその若葉のこの情の新しい諸君に何か書けと CHAIN 編集員にいわれて色々考えてみたが、経験も浅く、またこれから人生行路に迷い迷っている身にとっては教訓を重ねる程の自信もないまま、諸君らの年頃中学校を卒業して一年浪人して旧制の高等学校へ入学した時満18才頃の日記をめぐっていた。

その日記の一頁に「年重ねる事十有八年人云う人生春なりと、春浅くして風雪深し」と云うほか気負った文章が見出せる。

頁を繰って行く程に三十年の青春時代の思い出が次々とよみがえって来た。寮歌に明けストームに暮れ、徹夜して行なう議論、試験勉強等々、幼いながら精一杯一日三十六時間生きて来た時代がなつかしく思い出される。

この生活の思い出が忘れかねてか、長い戦いのみじめな敗戦ののち、自ら好んで専門学校の教師を志望し、若い人達と生活を共にする様になってから早や十五年の年月は過ぎた時代の苦闘の中では日本中の人々の中から笑顔はなく、学園からは歌声は消えていた。

この学校は歌を忘れた「カナリマ」だとのなげきを残して学園を去って行かれたY先生の姿がなつかしく思い出される。こうしてその歌を思い出して来る年も来る年もむなしい努力を重ねている間に我が国の経済も段々に復興し学生の生活も段々に昔の状態にかえって来た。それなのにあの待ち望んでいる青春の歌声は学園の中に起らなかつた。何故だろう？、何故だろう？、ある時一人の卒業生の言葉にがく然とした。これはこの学校を卒業して何か一番嬉しい事かという、学校の人達の世向、学界、業界での活躍ぶりを聞くことだと、繊維化学科の創立後日は浅くその成果を世に問うには未だ無理であることはその先輩も充分知っている筈ではあるが、学生及び教師の心の底には、我が大学が二期校であるという劣等感が深くしみつきよんでいるのではないだろうか。もしそうであるなら、その劣等感というものは嘗てあつて益のないものという事を、学生に自覚してもらふと同時に研究とか業績と云うものは、決して学歴、門閥とか年令、性別、国籍とかにあるものではなく、個々又は集団の能力によるものだという事を言葉でなく現実として

立証しなくてはならないと考えた。

今は世間では東大の工学部より良い（この意味は私に方らないが）と云われる東京工大のその先輩、蔵前生徒は「煙突のある所に蔵前生あり」と意気高く工場にとび込んで行ったと聞く。そして我が繊維化学の卒業生も再び訪れた技術革新の嵐の中を未来の栄光を夢みて戦っているのだ。重ねて云うが劣等感こそ百害あって一利なしと。

三十年前私達が国家の栄光を背に高らかに歌って来た。その歌声はむなしのものであったにせよ、私にとっては最も楽しかった青春の一コマであった。今や諸君は世界の人達の生活を豊かにする技術革新の相い手という誇りを持ちその間から足が地についた歌声が高らかに起る事を待望して止まない。

「歌という文字に仮託したが、他の文字を置き換えて頂いても結構だ。」

## アルバイト考

四回生 寺田 英一

新入生諸君の中には今までにアルバイトをやっていた人もあろうし、又これからやろうと考えている人もあるだろう。私もこの三年間種々雑多なアルバイトをやって来た。アルバイトをする者の理由は、経済的理由であるが、もう一つ大きなことは、社会見学であり、人間観察である。

考えてみると、一旦大学を卒業して就職してしまつと、余程のことがない限り途中退職や転職といふことに遭遇することはない。普通なら停年まで同じ会社で同じような仕事をして、人生の大半を過すことになる。従つて他の職場の様子とか、そこで働く人々の物の考え方、見方などは、人づてに聞くか、書物などを通してしか知ることは出来ない。ある職場にアルバイトとして働く場合、たとえ期間が短くても、そこで得られる知識というものは、あわただしい工場見学や、人から聞いて得られるものとは比べものにならず、しかもいわゆる工員階級の人々と交ることにより、その会社の裏面や、職場全体をおおっている雰囲気、上役と工員、平社員との関係、工員と事務員との関係、その他色々のことを知ることが出来る。

例えば、浜口染工といへば、京都では大きい方の染色会社であるが、昼夜2

交代制の12時間勤務であるといふこと(この会社では現場の人々は全員が1週間交代の昼又は夜勤で1日12時間働いている)。またこれがどれ程きびしい重労働であるかといふことは、実際に働いてみて初めて分るのである。

また麻の紡績ではかなり有名?な日本繊維工業は資本金12億円であるから中企業の上位にあると云えるが、その研究室(検査室という方が当たっているかも知れないが)いかに貧弱なものであるか、また女子工員の給料がいかに安いものであるか、などといふことは身をもって感じる事ができた。

これらのアルバイトは約1ヶ月程であったが、大抵は一週前から10日位で1日だけといふのもいくつかある。ざつと計算してみると、家庭教師の仕事を除いても、1年で約3ヶ月余り働いていることになる。但しそのほとんどは休暇中である。私の経験から云えば、これくらいが学生アルバイトとしての限度のように思われる。これ以上アルバイトに熱を入れると、成績にもさしつかえるし、クラブ活動の方も怠けることになり、また友達に迷惑をかけることにもなる。

アルバイトの効用は社会見学だけではなく、もう一つ自分というものに自信がもてるようになることである。私の場合どんな分野の仕事でも余程の熟練が必要なものを除いては、肉体的労働、精神的労働にかかわらず、少くとも人並みの仕事は出来るといふ自信がついたことは大きな収穫であった。

思うに、アルバイトは学生の持つ特権の一つであつて、自分の思うままに仕事を変えることが出来、また色々な社会に生きる人々と交つて、そのかくれた面を知ることが出来る。しかし私達が大学を出て就職してしまえばこのような機会二度と来ないのである。そういった意味でぜひアルバイトはやっておくべきだと思ふ。

アルバイトをやることにより、浪費ぐせがついたり、つまらない遊びを覚えたりするといふ弊害はある。しかしこれは本人の気持の持ちようでもなることである。ただ学業がおろそかになるといふ虞はどうしてもまぬがれないようである。従つて適当な程度のアルバイトなら大いにおすすめた。アルバイトの斡旋は京都では百万遍の学生相談所を利用するとよい。過去3年間の間には、実感としてアルバイトのひまな時に勉強しているといふ錯覚に陥っている一時期もあつた。幸い単位は一応そろえて卒業見込みと相なつたが卒論を手がけるに当つて今までの不勉強を痛感している次男である。

以上先輩の一人として、後輩の諸君に何らかの参考になればと思つて、私のアルバイトに關する考え方を述べた訳だが、又違った考え方があれば聞かせて頂きたい。

法  
さり  
ンヤ  
乏し  
高校  
るも  
た。中  
どれ  
いなし  
ヤガ  
リそ  
悔は  
まだ  
うと  
めて  
の肉  
する  
「よ  
れる  
の語  
特長  
既り  
変え  
術は  
実験  
みな  
粒の

# 化学入門

一回生 中道和也

法、経、文学部といったいわゆる文化系に進学する気は毛頭なかった。さりとして物理や、「さんすう」で一生飯を食う程頭もさえていなく、ダーヴィンや天皇陛下といったブルジョアのやる生物を専門にするには余りに金力に乏しかった。これに比べて、あの簡単な比例の算法を使えばほとんど解けた高校の「ばけ学」程、適度に頭の運動にもなり自然界に興味を抱かせてくれるものはまあなかった。そこで行き先は決った。その森は化学と呼ばれていた。中にはどんなおそろしい化け物がいるかどんな冒険が必要か、どんな道がどれ程つくられているかは、高校の黄色の表紙の教科書にも参考書にも載っていないので知らないけれど、うっそうと繁った木々の向うには、まだまだナイマガラの瀑布や、未知の白い狐や赤狸も、長い繊維をしたつる草も無限にありそうに思うじ雑誌にも載っていたように思う。森への道は遠そうだけど後悔はしていない。足踏みを終えてこれから出発しようかとしている状態で、まだいや気はさしていないから、本当によかったと思う。この道を歩み出そうとして、日頃の講義を思い出してみた。さえぬ脳を一層さえぬ方向へと進めてくれるのはまだしも、百分程の睡眠時間を邪魔さえする教壇に立った人の肉声やマイクの音。語学に至っては失望した。幼稚園へ通っている子供のするのと変わらない。これらがパパ、ママ、あれがパン、読んで訳して、「よし次ぎC、7番」。中学、高校と違って本に出ていない事をしゃべってくれるだろうと思って出席していたのに。でも又考え直した。こんなのが大学の語学の特長かもしれないと。教える人と教えられる人が同一人であるのが特長であろうと。文化系に進んだ友達にはさぞ後悔しているだろうな。毎日が眠りの日だといって。もとの道に戻ろう。錬金術者は、あらゆる金属を金に変えようとし、医者は何んとか不老不死の妙薬を作ろうとしたが、そんな魔術は作れない事が証明されたにもかかわらず、副産物が沢山作れ、失敗する実験という物まで付いている化学、こんな所に魅力があるのだろう。やってみなければわからない「ばけ学」、やってみなければわからない未来、芥子粒の実、一つでも実らせたいものだ。

# オリエンテーションから

二回生 西沢康雄

「学内で学生運動をしたい者は本学を止めて他のもっと暇のある学校へ行け」というあの古典的な名文句を聞くためにわざわざ今年も50円の電車賃を使ってオリエンテーションに参加した。今年に限りこの名文句が聞けなかったように思うが、小生が聞きのがしたのか？ まあそれはとにかくとして、本学の教育の目的の一つに「円満で有能な人間の養成」という項目があったように記憶している。このことについて考えて行きたいと思う。最初に「教育」とは何か？ 又その様な意味における教育が本学で行なわれているか？ *education*という言葉は内に内在しているものを引き張りだしそれを伸すために手助けするという様なことを工芸の増野教授（英語）に聞いた。又広辞苑によれば、「教育」とは「成熟者が未熟者に心身の諸性能を発育させる目的で一定の方法により一定期間継続して反ばす影響」とある。本学の先生方が成熟者であるということには異論のないものとまあしておこう。「心身の諸性能のうち「身」の方はまず良いとして、「心」の諸性能を発育させる目的で一定の方法という所までくると止まらざるを得ない。わざわざ教室まで来てノートの朗読などせず暇なときにテープレコーダーに録音しておき、授業の始まる前に録音テープを再生する方がきがきいているくらいの講義、教筆来一字一句として違ったことのない古くさいノートの朗読、これらすべて学向に対する真摯な情熱を減退させるものであり「心の諸性能の発育」を妨害するものである。そして本学の学則や教育方法なるものは、学生の自主性を失なわせるものであり、社会には、とりわけ政治には背を向け、ただ、「がり勉」のみを強要するか、山に行ったり、クラブ活動をする事によって社会から、政治から逃避しようとする無気力は、かたわな人間を養成するにすぎない。又それに対して多くの学生が（多くの学生がと云ったことに異議の申し立てられることを期待するのだが）何の反撥も感じていないように思えるがどうにもならないとあきらめきっているのか。これは一体何故なのであろうか？ 思うに本学でまじめに、勉強して良い成績をとればまあ少々の不況が来ても、倒産したりする心配のない大会社の就職を無料でしてもらえ、まあ首尾よく採用の運びとなれば、一万数千円から二万円前後の初任給



がもらえ、まじめにつとめてさえいれば首になることもなく、それどころか将来が約束されたようなものであり、政治や社会にさほど関心を持たなくても自分の生活には何の差しつかえもなかろうという安易な、利己的な、みにくい気持が心のどこか潜んでいる。もつと「政治」の重要なことを認めるべきである。我々のいかなる末梢的な部分にも必ず政治が入りこんでおり、すべての向題が政治を抜きにして考えることはできないのである。うそと思うなら、自分の身の辺のどんな細々なことでもよいから考えてみるがよい。必ず政治がそこにからみ合っていることに気づかれると思う。だからいくら政治に関心を持ってもちすぎることには決してない。勿論、何をするにもき立っても我々はあくまで学生であり、学生以上のものでないことはその前提としておくべきである。といつても我々に何にもさせてくれないんだから前提もあつたものではない。次ぎに「円満で有能な人間」ということについて考えて行こう。この一年間小生が人から聞き、実際に自分で見、聞きしたものを総合すると本学における「円満で有能な人間」とは「まあまじめで、おとなしく、従順で、優が沢山あり、思想的にはどっちかと云えば右よりの、左については、さわらぬ神にたたりなし式に存じません、知りません」といったようなあたりさわりのない意見を述べるような人間をさすように思える。まず「まじめで、おとなしい」ということには異論はないが、「従順」というものも本学に於いては、先生の云う通りにせよ、まあ損をさせるようなことは決してない、「優」も沢山取ることができるとし、それがひいては大会社への就職あつせんよりどころとなり、将来も約束されているようなものだとされるもので、これには弱い我々にとっては傍見をふれずに言われる通りにする。本学に於いては「従順」ということがこんなことである。「思想的には左については存じません、知りません」ですませるであらうか？ 自由主義的立場に立つ人はより一層マルクス、レーニン、フルシチョフ、毛沢東のとなえる共産主義や社会主義について理解し、自分の信ずる自由主義が優れているという、しっかりした信念を持つべきである。それに関する本でも読めばマルクスやレーニンやフルシチョフ、毛沢東の共産主義が優れていると思ふかも知れない。もしそうにでもなれば就職にも響き人からも赤よばわりされて将来にもよろしくない影響があるからと思つているのなら実に馬鹿げている。もしも自分がよろしくないと思つている共産主義の浸透を防止しようのもしかりとした信念以外のなにものでもない。(多分前述のような人は、戦争終結やいなや、今まで戦争論者であつた人が社会主義に変わり、帝國主義を非難しているように自分の回りが赤く染ってくるとうすぐさま鞍替え

をやるであろう)小生も色々本を読むに従って徐々に自由主義の方が共産主義よりも優っているという信念を深めつつある。もつとこの信念を深めるために共産主義や社会主義について色々なことを知りたいと思っている。最後に勉強に熱中している人も自分が社会の一員であることを自覚し、社会や政治に関心を持ち、学生運動や遊びに夢中になっている人も今一度自分が学生であるということの思い起し、京都工芸繊維大学も新しい時代と洋々たる未来に適応しうる大学に築き上げるために、学生と教職員が一丸となって努力したいものです。そのためにも先生方の寛容な態度を切に望みます。それだけでなく現在の日本を、世界をより住みよい、そして現在に至るまでの蓄積されてきた人類の遺産を子々孫々にまで伝えるためには世界の平和を確保することが必要であります。そのため我々はフルシテヨフとケネディが振り上げたごぶしをおろし、仲良く握手させるために微力ながら尽力せねばならない。(具体的にどうすればよいかは各人の判断にまかせる)。

我々は常に「かたわな人間」にならないように注意しなければならない。我々は学生であり社会人である。しかし学生以上のものには決してなりえない。

## 二週間得た事

一回生 秋元 明

ある種の感激と期待をもって、又、人生の否、現実の厳しさを身を以て痛感しながら入学した我々にとって京都工芸繊維大学、いや大学というものがこんなものであるかということこのわずか二週間ほどでしみじみと感じたのである。笑い話にもあるが、ある盲人が象を手でなでながら、「象とは大きな柱のようなものだ」といったとか。真にこの笑い話通り我々/回生がこのわずか二週間で経験した事、さらに私の話にあてはまるものなら我々にとってこれほど喜ばしい事はないし、又頼もしいとも感じるのだが……

もつと楽しい、もつと活発な、もつと自由なものだと期待し、そう信じていた我々にとって狭小な官僚主義と、事なかれ保守主義とが生活の全面を支配している大学というものに直面する時、少なからず失望をし、大いに義憤を感じるのである。社会の激しい動きの中から学園に一歩足を踏み入れるとこう感じたのである。「ああなんと静かな平和な所なのだろう。まさに大学の雰囲気とはこうでなければならない。学向をするのにこんなすばらしい環

境は少  
を意味  
養成す  
ある。

ある  
な暇人  
でいた  
にして  
日毎日  
性を失  
か?形  
の講師  
そうが  
である

自然  
戦争時  
有を生  
学の一  
孤をみ

とこ  
故そん  
利己的  
の芸術  
故自分  
はわか  
のよす  
ったと  
さて  
のもの  
々の短  
るし、  
れてお  
どんな  
失望

境は少ないだろう」と。だが笑ばこれは虚構だったのである。平和とは沈滞を意味し、沈滞は無意識を意味し、さらに、ただ、何かのちっぽけな暇人を養成するためにかようなムードがすでに作られてあった事に気が付いたのである。これが不幸の始まりだった。

ある先輩がこんなことをいっていた。「学生のくせに政治だなんて生意気な暇人がするものさ」。その彼が白昼堂々と授業をさぼり、何処かの喫茶店でいたずらに時間を潰しているのである。彼の生活態度そのものの是非は別にして、私はつくづく理科系の学生というものについて考えるのである。毎日毎日のあの吸血的な勉強が我々に澆刺たる若さと、創造性と、そして芸術性を失なわせているのではないだろうか？ 我々はこんな事でよいのだろうか？ 形式的な教養科目、十数年も同じ問題でその場をにごしている古い感覚の講師連達一最も、学問とは永く不変のものであるから何十年同じ問題を出そうがかまわない等と暴論を吐く人もいることだろうが一全く悲劇いや喜劇である。泣きたくなる喜劇である。これ不幸の二番目。

自然科学が明治維新後は富国強兵の一手段として、さらにあの忌まわしい戦争時代は軍事技術の先生として、今日では独占企業の一即ち小人数の一利潤を生むために利用されている現実を認識するに至っては、我々直接自然科学の一分野に足をつっこまんとしている者はただ自分の専ら分野だけでその孤をみがいているだけで責任を果したといえるだろうか？ 絶対に否と信ずる。

ところが、大学においてはそんなことはどうでもいいらしいのである。何故そんなことが言えるかって？ 答は簡単である。我々の目の廻りを見たまえ利己的な、排他的な学生がなんと多い事か。私は嘲笑してやるのである。己の芸術的才能と意識力とを否定し、吸血病にとりつかれている人間達を。何故自分を大切にしないのだろう。何故隋性だけで生きているのだろう。私にはわからない。ここは頭によすぎる善良な人間が多すぎるかもしれない。頭によすぎる人達と生活していく事程奇いことはない。これ三番目の不幸であったと思う。

さてこうして二週間を経過して大学という有機体の中にはあまりにも多くのもの、我々を逃避に追いやるものが多すぎると感じた。通則などという我々の知らないうちから絶対的に遵守せねばならないものがデントすわっているし、公共性の名のもとに言論及び集会の自由さえも大学のどこかで支配されており、学生はその中で可変相にうろろろしているだけである等と言えはどんなものか？

失望は失望、落胆は落胆、不満は不満、それはそれでいいのである。そし

て我々が中心になって本当に豊かな、異りのある自主的なものを造り出す必要性をしみじみ感じたのであった。

## 某月某日

三回生 金井政洋

南風が気持ちよく吹いて来たが、それまでも何か孤独な響を持っていた。響きといおうか香りといった方がいいのかもしれない。彼は次第に離れていく。古い故郷の田舎のことを思い出したのだった。しかし彼はそれはそれでけっしてそれを別に悲しがったりしたのではない。それはまるでスリガラスの箱の中にしまいこまれてしまったようで、目をこすって唾でもつけて注意しないとはつきり見ることはできないし、まして響きのさたがでないのは勿論のことである。古い彼の故郷はもう地上の具体としては存在していないのはいいとしても、彼自身ノアの箱舟でも束せられて大洋の真ん中にとり残されたような気がして少々気がめいるのである。自分でははつきりと記憶していると信じ込んでいたのだが、今急に何だかぼんやりしてしまったようだった。

彼がよくその前を通った庭は彼の家からは歩いて10分もせぬ所にあつた。ある夕方大きな陽がもうぶるぶるとふるえながら燃え尽きるように愛宕山に沈んでしまふとすでに月は東の空に氷の薄片のように輝やっていた。突然その庭に出くわしてしまったので少なからず驚いた。こんなに近くに、それもこんなに素朴に美しく、庭の道に近い方にチューリップが二列並んでいた。赤いカーネーションも、薄紫のアイリスは埒に最も近くチューリップと垣の間に咲いていた。チューリップはまだしうかりとつぼみを肉じていた。しかし何色に咲くかはすでに明らかであつた。赤、白、黄から黒に近いものまで入り乱れていた。彼は夕方にも通つたし、朝早く通つたこともある。朝方には時々軍配の婦人が水をまいていることもあつたし、夕方には男の子が畑を耕しているのに出くわしたことがある。歩き出したばかりの坊やがあちこちと歩き廻り、かまどから上る紫色の煙を見るときもうすぐ夕飯時だなどということがわかつた。彼は一日一日とチューリップを気にするようになった。やがてチューリップはつつましくつぼみを解き、彼の予期していた様に咲き出した。チューリップは初めて見た時のままで、一本として切りとられなかつた。彼は最初からそんなことを予期したわけではないから少々不思議に思った。しかしもし切り取られていたとしたらそれ以上に悲しい気持ちになつたであらう。

出す必  
ことは疑いもないことであつたらう。彼はこの次はこの次はと思ひながら、そして数が全てそろつてのを一目見て満足して帰っていった。

今日はいい天気だ。あの深い空は何という青さだ。明日も晴だな。何とすばらしい夕焼けなんだろう。

そうこうする内にやがてチューリップも力なく桜花のように開き始めた。彼はもう当分この庭には来ることもないだろうと思つた。

「まだ雨が降っているだろうか」そういいながらミスター・ハイホープは外に出た。ミスター・ホワイトの方がどうだど尋ねたが、少し降っているようだが霧雨だ、もう遅いから帰るといつてそのまま歩き出した。

夜の表通りにはもう人影もほとんどなかった。彼はくぐり戸を妙心寺の方に入つた。霧雨の中では石だたみがオパールの如く輝き、水銀燈の松陰はあやつり人形のように揺れた。カチ、カチと快い靴音を響かせながらミスター・ハイホープはいろんなことが頭に浮び上つてきた。

「反抗は青年の象徴のように言われ、それが又独立心とか積極性を示すものであると考へたがるが、それは全然とはいわないが誤つていふと思ふな」

「それでは我々が不満を感じたり又反抗したりすることはいけないといふのか」

「いけないとはいつていない、むしろそういうのが青年であるとも思へるので、応々にして反抗といふものは不満を感じるによつても何のものにも何ら積極的な同意を与えないことの口実とする場合が多いのではないかな、だから僕は青春とは何物かを求めて苦悩する時期だと定義したいな、何物かといふのは勿論“愛”だと考へていたのだが、だから自分がそれをつかんだといふ時が青春の終りでもあるのだ」

「つまり、“草原の輝き、花の栄光突なわれようとも嘆く勿れ、その下に出ずる力を見出せ”といふわけだな」

「僕等としてはもっと生命に対する根本的態度について語るべきだと思ふな、それは受け容れることであり、またそうでなくてはならないのだ。そしてこの生命を受け容れることこそ、自覺的人間精神の最も進取的行爲なのだと思ふ。このことはパール・バック女史も云つていふことなのだが、それでこの爲には僕は思ふのだが、“愛”が必要なのだ、何と云うか何々のばらばらの人生が“愛”のかけ橋によつてのみ救われる。勿論僕のいう“愛”は自己犠牲といふものなんだが、我々お互いに大切なのはこの信頼なのだ」。

ミスター・ハイホープはなる程と思つた。世界観とか、信条、哲学というようなものは個人々々のものであつて、他人にそれをおしつけ、強要できぬのみか、他人のものを（狂心的に）そのまま自分のものとして取入れることは出来ないというような事をどこかでよんだことがあるように思つた。なる程後のかけ橋か。

「だからそのためには一生懸命努力しなければならないと思ふ」

「僕は“愛”はもつと自然なり、という気がするのだが、自然といつてしまつては良く表わせないかも知れないが、何かもつと静かな感じがするのだが、熱狂的とか、あくせくといった作意の感じられないものというのだが、勿論静かといつて消極的ということではないだろう。愛は真、善、美というものを包んだものだと思ふ」

「真、善、美と云つたが、そんなものは本当にあると思ふか、僕は本当にあやふやなもので信じられないのだが」 それまで黙っていた、ミスター・ブレントが静かな低い声を放つた。

「例えば真にしたつて、個人によつても異れば時代によつても変わるだろう、それに人間にとっては真であつても宇宙全体から見ればそういうことは無意味だと思ふな」

「勿論僕だつて絶対的なものがあるとは思つてはないが、それに近いものはある筈だ。少くとも僕はそう信じたいな、客観的な見地からすれば全く愚かな事かも知れない。そうであつても別にどういふことはない。それにもかかわらず人間は或理想を抱いて自分の志とか判断のしるべとして思われるのだけれど」

「例えば“戦争についていえば、君はどう思ふ」

「勿論いけない事に決まっているだろう、生命を守るために生命を奪い合うという事は意味のない事だしな」

「それから君はよく“白い墓”のことをよく云うけれど、偽善とは一体どういふことなのだろう。欲しいものに手を出すといふことはいけないのだろうか、動物のように」

「君は人間の片面の本能を云うけど、どうかな、動物の場合はまた別問題だけれど僕はどういふていいかわからなくなつてしまふな」

「何をしてはいけません、これをしてはいけません、僕等は生れた時から教えられ習慣となつてゐるのだけれど、果してそうでなければどうだろうな」  
「僕ははっきりといけないと言ふことが出来るが、何故かといふと愛情が足りないからだと言ふ」。

「結局、愛が全てというわけだな」彼は国家、友人、或いは家族とさえも心から打とけたことはないように思った。客観的に眺められるようになればなる程、まるで無邪気さというか素朴さというようなものが失なわれて行くようで、そういう場合には軍々何となく冷淡さが伴っているようであった。考えてみればこの方が“愛”に近いのだろうか -----

そのような孤独は時にはみじめなものであるかもしれない。しかし彼は他人の理解とか同情とかから切離されるのを悔みはしなかった。勿論別に彼自身としては同情されるのが嫌なわけはないのだが、相手の立場を考えてみても自分までが赤面しそうだった。他人が冗談事とどって笑れてすぐ忘れるならまだしもよかった。それが本当の愛のかけ橋によって結ばれるなら言う事はないが、中途半端な気持でお互いに気まずくなるようなことにでもなれば最低だと思った。彼は友情についても愛情と同様過信するにはあまりに孤独であった。“愛”自分は愛が足りないのだろうかと思った。

ミスター・ハイホープは *Old Smoky* をつばやきながら帰ると、大きなあくびを一つして眠ってしまった。

## ニューヨークの真中でおにぎりを食ってみたい

一回生 宮崎能久

人間の個性を最も大切なものと考えて、19年間生きてきた僕だ。多くの本を読んでみたい。多くの山々に登ってみたい。多くの女性を知りたい。色々な風俗習慣にも接してみたい。限りない若い夢。あらゆる方向への青春の彷徨いや、もつと現実的な希望は、無限の可能性を秘めて、どこまでも伸びて行く。僕の個性は、自己の内部にあるこのような多様性が、制御されずに出て来ることだ。これは直情径行と呼ばれるが、もう少し知的な意味で身に接しているすべてを吸収したいという、若い欲求が根本にあると思う。

「ニューヨークの真中でおにぎりを食ってみたい」、この言葉で、自分の気まぐれな心を表わしてみた。何故ニューヨークにしたのか。ソ連でも中国でもエジプトでもタチヒ島でも良い様だが、僕は化学という物質文明の一端を進む人々の一員に加わろうとして、この大学へ入ってきた。そこでこの文明の最高峰であるアメリカ、その中でもその中心のニューヨークにしたのだ。

夢の中での話だから、日本を離れる動機が何になるかは不明である。事業

の失敗か、研究の行ずまりか、失恋か何かだろう。ただ自分の殻を破ってやりたい。狭い現実から、つまらぬ自己の生活から逃避したいという、どこか卑怯な気持である。言葉も良くは通じない全くの他人の中へ、自分をほうり込んで試してみたいのだ。ハーレムに入って、怪しげなスープと黒パンで生きるのもいいだろう。青い眼の金髪の女の子と恋をするのもいいだろう。こんな気持でふと外国航路の船に忍び込んでしまったのだ。

ある早朝、ニューヨークに着いた。そして、トレパンと青いシャツと、すりへった運動ぐつで、疲れ果てて陸に上がる。ぼんやり眺めるビルの上に空が両抜けな一つ目小僧の様に、下をにらんでいる。もやの中にかすむ摩天樓の先端は、人間の物質文明の極限を象徴するかのようによびえているのだった。腰に下げていたふろしき包みをひろげてどこかの石段に腰を下す。ニューヨークまでこんなものを持つてくることが出来るわけではないが、夢の中から許してもらおう。取り出した白いおにぎりは湯気をたてていた。それにがぶりとかぶりついた。牛乳配達が通って行く。ノラ犬が（ニューヨークだってノラ犬くらいいるだろう）しっぽを振って寄ってくる。おにぎりの中から赤い梅干が出てきた。ああ、俺は日本人だ。こんな感慨が胸に上ってくると、自分が今、ただ一人思うままに生きて、この物質文明だけがとび抜けて発達した世界に於いて、目的もなく立っているのに気がついてため息をもらす。自分が憧れていたニューヨークは、まだその巨大な動きを開始していない。又、とぼとぼと歩き出すと、犬も一しよについて来た。歩きながら考えた。この空しさは何なのか。なるほどちっぽけな日本から出て来た僕には、日本と別の空気を感じている。あの日本のパチンコ屋のみみっちい金属音もなければ、何の思想も持たない中途半端な新聞もない。だだ膨大なこの文明には、本当の文化がないのかもしれない。そのための空しさなのか。それとも、この俺の泥まみれの、苦笑いの青春のためなのか。

化学に身を捧げようという俺が、こんな空想をするのは、何のためか。それは、実際自然科学によって求められるものが、一般にいつてやはり物質的だと思っからだ。自分、いや人間の内容の半分以上いや大半は、心の中にある様に思っ。自然科学の法則に合わないからといつて、真ではないと否定できるはずがないということだ。化学の実験をしている人間にとって、ある反応によって得られる結果は、既知の場合が多いだろう。又その結果を確信して実験を行なうのだ。

科学的な物の考え方を否定するのではないが、何か不合理の真という存在を認めたくなる気持。これが僕の大学へ入ってからの一つの疑問なのだ。



# 婚約者

四回生 原 隼

約束の夜から二人だけの道を行く。

樽一杯敲きつける木枯しの中に心まで凍らせる冷気に愛りながら  
時の刻音に脅かされて つまづき喘ぐ人も  
暗の中に予言の水晶を求めて 不安に抱き合いながら  
互いの目に真実をかちえた

聖夜の灯下に冷え切った君の手を重ねて

黙って求めて十字架をくぐった。

“得られたのか” “何となく”

燃え上る太陽に映えて 毒々しい緋色の君の水晶が

こげついた砂の上で動かなかった。

“どうした” “何だか無精に生きたいの”

跳ね返えす若草を踏んで

君は私の前から何処までも駆けて行く。

“おーい、どこまで行くんだ” “早く賣方も駆けて。二人が求めた  
道なんですもの”

枯尾花が背丈を越えて そこから虫の音が泌み出すと

夜と月から感傷の詩が流れ出して 誰もが生より死を考える

“淋しいのか” “生きられるかしら。自分が一人だと思っせいね”

四季の稚拙な歌が、此が二人を一層悲慘にした。

喜こびが狂喜に変わり、悲しみが死に絡ばれる

婚約者のテリケートな人生のひととときに

知らず、寒々しい稚語を羅列していた。

# 交通七不思議

内野規人

世は正に交通地獄、何としても嫌なものである。然し私には色々分らないことがあるので、既に御存知の諸賢があれば御教示を乞う。

1. 乗用車後部座席の飾りカーテン。何のためにつけているのか全然分らない。あれ位で車がデラックスになったら結構なものである。5~60軒越したらサイドミラーだけによる追越しは非常に危険である。御本人は不自由しないと云うかもしれないが、あるのとないのとでは、ない方が見易いのは確か。日除は我慢するんですな。メーカーが始めから付けている事があるに至っては全く驚く。

1. 雨の日のライト。視界の悪い雨の日、日の出、日没時などにパーキングライトをつけている事が殆んど見られない。スピードが出れば出る程無灯は危険である。自分の存在を相手に知らせることは、自分の危険を防ぐことである。自分の命よりもバッテリーがあるのが心配なんではしょうか。

1. 車線跨ぎ。小さな体のくせに、二車線に跨って堂々と(?) 走っている。謙譲の美德を誇りにした日本人の化けの皮がはがれて、利己主義がむき出しになった所為か。それにしても試験の時に悠々と車線を跨いで走っていたら一ぺんに落ちた筈ですがね。

1. 大型車の横暴。犬でも腕力(?) の強い奴はおっヒリと構えて頼もしいものですがね。テンピラヤヤくざの空威張り位にしか見えません。とにかく強いのは分っているんですから、バスやトラックはもう少しおとなしくしてもらえませんか。

1. 単車のS型追越し。本人は命が惜しくないんでしょうかね。冗費や親爺の横暴も困るけど、末っ子だからって、そう威張っちゃいけませんね。

1. 急ハンドルの障害避け。ギリギリになるまでブレーキに足がかからない。本人はうまい心算かもしれないが、車の運転は車を上手に動かすことだけではないと思うんですが。

1. ホーン。信号が変ってコンマ以下数秒も出足が遅れるとすかさずブー。そんなに忙がしいんでしょうか。側路からメインには入る時も同様。あんまり急がすどまごつくのがいて反って遅れやしませんか。それとも子供み

たいにホーンを鳴らすのが面白いんでしょうか。

書き出すとセツでは足りない程ですが、それにしてももう少し気楽な世の中にならないものんでしょうか。

## セクト主義

四回生 原 隼

エリート意識とは本領を異にするセクト主義が案外、群衆心理に結びついていて驚かされる事がある。それは集団の中の個人が個々にそれを信奉するものでなく、三々五々に集まってくるとその人間の意識下にそれが芽生えるといった方が良い。そしてそれが博愛主義と極端な自己主義の中間にあつて同時に両者の性格を兼ね具えている。しかし一人一人がこの三者を持つてある時は此、ある時はこれとその態度を交換させながら、誰々は何々主義者だ等と割り切るのは妙なものである。

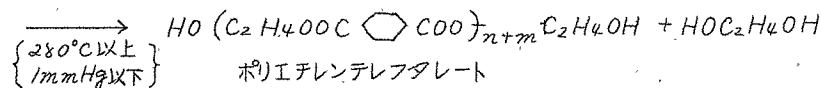
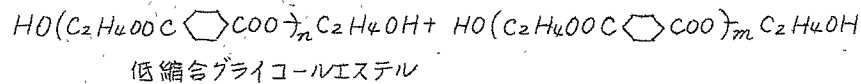
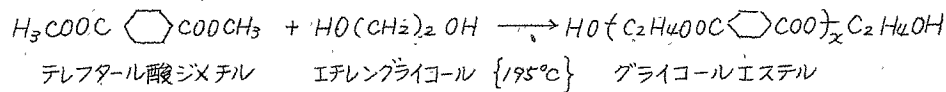
例えば我々の身近な例を採ると、三回生、四回生の実験の班、又クラブ等も然りである。同じ“学生”を隔絶する特権というものは無い筈だから、そのセクト主義が何処からわいて来るかという点、その源が単純な群衆心理に惹かれた無思考な人間である場合が多い。セクト主義の是非について此等は有害なものの一つである。又こっけいなものもある。自分という個人は異つた多くの環境の中に幾重にも包まれている。この際自分の隣に立っている人も環境の中に数えて考えると人は自分を誇る以外に環境を誇る本能的な習性みたいなものを持っている。例えば自分の頭が少々いかれていても、兄弟や両親、教師や友人、親戚から果ては同郷人、同国人或いは人種が同じであるからと、およそ出合ったことのない人間を誇りに思つて、つい自分の足りないのを柵に置き忘れて喜ぶ人がいる。この種のものは是もあり非もあり、確極端に走るとこっけいに過ぎない。

一体ここで自分がセクト主義等をどりあげる気になつたのは“ポリマー”という自分の生涯の食扶持の定掛りになるかも知れない奴を研究しなければならぬ破目になつてからである。自分は今ポリエステル繊維“テトロン”の共重合による改質という自分でも皆目判らない事を手掛けようとしている。そして奇しくもこのエステル樹脂がセクト主義なるものを強烈に信奉してちつとも高度の重合を起してくれないものだから、どろどろの白い奴をつまみ

上げて嘆息をついて生協の食堂に救いを求めることになる。それだから自分の懐を愛する手前、どうしても此を考えざるを得ない訳である。

井本 稔 — 実際兄弟揃って最近よく儲けておられるが、そうとは知りつつ私もその餌食となつて — の「レオロジー入門」(井本立也著)を読んだ所が、ポリマーの特質の一つ“二次転移点” — これは高分子の試験に出されて労を惜しめなかつた奴だが — が実はポリマーのレオロジー的性質(流動学的)と見做して説明してある中に“セグメント”という言葉がある。実は此奴が自分の懐寒からしめる奴である。

御承知の如くポリエチレンテレフタレートは、エチレングライコールとジメチルテレフタレートとを縮合させて得られるものだが此が次の如く二段に反応する。



とにかく先輩でこれを手掛けていた人はなかつたものだから、暗闇に手さぐりでまずテレフタル酸ジメチルにエチレングライコールを加えて温度を上げていくと低縮合のグライコールエステルが得られる。此が上辺は香稷郁たる純白の美貌をしているが、此が世間で創価学会に入った美人みたいなもので強烈なセフト主義の信奉者で煮ても焼いても一向損着ないから腹が立つ。此が樹脂としてそのまま使用されたり、接着剤にでも使うならまだそれでも我慢できるがさて糸にするとなるとそうはいかない。とにかく分子量7000以上はないとまず大抵糸は望めない。仕方がないから再敬礼までして待って見たが一目この道に入ると他の宗派は一切お断りという何やら救みたいにせいぜい三量体か四量体どまり。業を煮やして荒療治に出たのが高減圧という手である。とはいえ科学技術振興等との池田さんの宣伝のあおりを食って満足な真空装置も容易に手に入らないから、サクシオンでというのだからいささか手ぬるい訳だ。それでも水温13°C近くでは蒸気圧計算から約20mmHg程度は可能な筈だ。即ち低縮合グライコールエステルが出来てそろそろエチレングライコールなる自己主義者がいなくなると減圧を始め脱グライコー

ル反応を行なう。此を短気に始めから尻をたたいて博愛主義者の高重合度のポリエステルを得ようとするモノマーのエチレンライコールが皆とんでしまつて元も子もなくなる。それで我慢してセフト主義者の生まれ出るのを待つのである。丁度池田屋を襲った近藤勇の心算そのままである。少しでも多く集まつてから切り込む訳だ。待つ事5時間、頃は良しと見て減圧開始。計画はこうだ。セフト主義者達の中からこの主義に疑問を懐く連中を説き伏せて此をポリエチレンライコールという形で引き抜きをやる。そしてこれをサフシヨンで除きながら博愛主義者の多からんことを待ち望んだ。又5時間しびれを切らして覗くと真黒な液が出来ている。此を急冷すると幾分白くなって固化を始めた。一夜明けて御対面となつたが色黒の固そうな風貌である。こういう女性に限つて気立ては良いものである。そう望んで融点を測ると250°C近くあつた。まずまずかなりの重合度の物と見てよい。乳鉢で敲いても容易に粉末にならない。どうやら自分の計画は成功であつたらしい。一部の強固なセフト主義者は博愛主義者の橋渡しに合つてポリマーという大集団の一員になつてしまつた。所がこの色の黒いのは微量のO<sub>2</sub>に酸化されているためという。何時の世にも完成に近づくと必ずそれを妬む邪魔者が入る。危くセフト主義者の勢力が興つてポリマーが分解する所であつた。それは考えてみれば確かにそうである。色の浅黒いのより色白で気立ての良い人の方が良いに決つている。こういうポリマーに廻り会う事の早からん事を一日千秋の思いで棚ぼた式に待つのも能がない。故に労を惜しまずあれこれやつているのである。そのもう一つの訳は出来た出来たと喜こんだポリマーは容易に細分しないから、文部省に気兼ねしながら容器の方に毀れて頂く事になる。同じ事なら美貌の人の爲に懐をはたく方がいくら無粋な御役人にも喜こんで頂けると思うからである。既に酋長の娘の爲に二ヶの分解液が生賢になつてい

る。しかし一方ではこのセフト主義が高分子化学の分野に於いて有益な場合も多い訳だ。米ソが互いに共産主義、資本主義に反目しながらも科学の進歩を急速に促している事は周知の通りである。唯此が戦争の手段に適応される時世界の有識者達は黒い娘さんに魅入られた小生の心境に在らうと推察される。我々もこの小さな大学にあつてさらに小集団に分れながらもセフト主義者の存在の意義も認め同時にそれが反目に結ばれないよう、博愛主義者でもなければならぬという訳である。

## 第2回

# 思想、随想、幻想

三回生 金田 洋二

権威ということ — 自信を持つ —

世間には何々の権威と言われる人が少なくない。そして権威のいうことは後になれば誤っていたと考えられるのだが、その当時は正に絶対的な力をもっており、その為には学問の発達が遅れたことも多かったのである。例えば、光に関するニュートンの粒子説とホイヘンスの波動説とが対立した時、ニュートンの権威はホイヘンスを圧したし、又、ガントールの場合は、彼の権威のなさ故に認められなかったし、ポアンカレの反論によって悲劇的な最後を遂げた。さらに湯川博士の中岡子諭も、同じ年にドイツのシュテッケルベルグという人が考えたのであったが、その師のパウリによって否定されたし、当時のボーアなども否定的であった。当時のヨーロッパでは、原子模型の変更という考え方を好まなかったのである。即ちこのような場合、パウリやボーアの科学的業績による権威そのものが、かえってわざわざいしたと云ってよいだろう。これらのことは何も科学の世界に限ったことではなく、日常よくあることなのである。

例えば、新聞を見ているとある事件の報道の最後に、政治評論家だとか、大学教授の話がのっているが、それを読んで気付くことは、何んともあたり前のことを言う人だろうということである。はばかりながら、僕のような奴でさえ言えそうなことである。ところが、世間ではその談話の権威を信じ自分の意見であるような錯覚におちいることが意外に多い。評論家といっても、私達と同じ程度のことしか事件については知らないのであり、それで意見を述べるのだから必然的に常識的な見解しか出来ないのである。マスコミの欲しかったのは、彼らの意見ではなくて肩書きであり、それによって世論は、不思議なくらいに左右される。そのことは、数年前の安保斗争の時に、経験して諸君みな御記憶のことと思う。こんなことを考えると、ニュース解説なども非常に危険なものとなる。テレビではキチンとした服装の人が、やわらかい調子で意見を述べると、大抵はその事件の真相を知ったような気になる。しかし、他の見方も多く残っているのである。それはただ一つの意見

であるというにすぎない。ここで云うのは权威が悪いということではなく、それを受ける側の向題である。权威と詭めたのは受けとる側であり、それにだまされるのも受けとる側である。私達は自分の作った落とし穴にはまるようなムードには十分注意すべきだと思ふ。もっと自分の考え方なりに自信をもつてもいいんじゃないかと思ふのである。

### 原子論について思うこと

昔の哲学者が東洋、西洋ともに、地水火風といった自然現象を宇宙の要素と考へていた。この証拠といつては少しおかしいが、五重の塔は地水火風空を表わしているとも云われている。このように元素についてのくわしい知識は、メンデレーフに到るまで得られなかったのだが、デモクリストスらは原子というものを考へることは出来た。そして20世紀の物理学はこれを素粒子に分解してしまつた。この素粒子は、その本質的屬性として不確定性とか相補性といったものを持っているが、相互作用とか運動は数学的に記述される。このような状態ではデモクリストスらが、原子とは何かということを知らなかつたけれども原子の存在を予想し得たということと、程度の差こそあれ、本質的には同じことである。このように自然科学は本質的なものからより本質的なものに進んで行くのである。この考へをおし進めていくと、素粒子の本質という向題が浮び上ってくる。即ち素粒子も又、究極の対象ではなくてさらに奥なるものがあると考えられる、これが観測される領域の向題ではないかもしれないが、観測される領域だけが宇宙でないことはアインシュタインによつて証明された。そこでは思考と抽象的な数学だけしか役立たないだろう。しかし、数学的に正しいことは何も理論の正しいことを意味するものではない。そのことは、ローレンツの収縮仮定が正しい理論体系から導かれたものではなかつたが、特殊相対論から同じ式が導かれたことからわかる。だから如何に抽象的であるとしても、それによつて素粒子の状態が説明できるものでなければならぬ。かつて量子論の初期のものは、それによつて古典力学が説明されえないという致命的な欠陥をもつていた。とにかく素粒子の構造を知る爲には素粒子自身を究めつくすことが先決の向題であり、前回にも書いたように新しいかつての量子力学のような理論体系が出て来なければ困難なようである。しかしここでさらに進んで一体このように次々と本質を極めていつても、果して究極にたどりつくか、即ち、宇宙は汲みつくしうるかということを考えてみると、恐らく汲みつくし得ないという結論に

なるのではないだろうか。宇宙はそのような無限の存在であるように思えるのである。又たとえ扱みつくし得たと考える状態になっても、それらの体系が宇宙にただ一つであると考えられるだろうか。このようなことから、僕は宇宙には決して人間の考えるような絶対はないと信じている。だから物理学者は永久に失業することはないだろう。

## 哲学について

哲学といえばデカンショの歌で代表されるように難解で面白くないものと考えられているが、B.ラッセルが述べているように、哲学が世間の常識から並はずれて難解であるのは残念なことである。その難解な故に哲学に対する認識が不足しているのは一つの事実である。しかし哲学が如何に今日の自然科学に隣与しているかを考えればそれが決して抽象的な思考遊戯でないことがわかるだろう。例えば日本の素粒子論が世界的に進んでいることは我々誰でも知っている。その原因を考えてみると大抵の人はその経済的事情即ち紙と鉛筆だけでよいことに着目して他を考えない。考えたって日本人が頭がよいということぐらいだろう。けれども、今一つの理由としてその研究を進める上での哲学的な基盤が確固たるものであったことが揚げられるのである。即ち理論が如何なる方向に進んで行くべきかその方法は正しかったかなどということが常に考えられ討論されていたのである。だから前にも述べたようにヨーロッパの考え方に左右されずに中間子論が生みだされたのである。その呉、ボウアヤパウリには一慣性のある哲学がなかったのではないかと思われる。β-崩壊の現象を説明する時にボーアは「エネルギー不減の法則」の不成立にしようとしたが、パウリは中性微子の導入という模型変更によって説明した。このパウリが中間子論の時には模型変更という概念を否定したのである。このように哲学が自然科学に於いて有効な背景となりうるものなのである。このことはオパーリンの「生命の起源」が唯物論的立場で書かれておりこの学説が今日正しいものと考えられている事実によっても明らかなことである。もっと深く考えるなら、今日哲学的背景なしには学問は考えられないのではないか、即ち従来のように色々な実験の結果からの類推からだけでは科学が成立しえないのではないかとさえ思われる。哲学によって現在の研究の位置を決定し、さらに将来の方向を定めさらにその方向に進む方法論といったことが必要なのではないだろうか。もちろん、研究あつての哲学であつて、研究もしないのに哲学もくそもない。しかし将来何らかの形で科学

の仕手  
ないだろ  
この美  
平易で

迷信

迷信と

な迷信に  
かのような  
学的であ  
るがアな  
今は一般  
ろん公の  
されるこ  
は事なる  
アエミに  
るべきで  
と言うか  
てもよい  
がある。  
はよく言  
て来して  
られたこ  
今日では  
るように  
常に立派  
いらもの  
に気分か  
世間の常  
色々なこ  
パーシ  
非常に



の仕事をすることであろうような人にとって一度考えてみる必要のあることではないだろうか。

(この呉、武谷三男著「弁証法の諸問題」「続弁証法の諸問題」が比較的平易で面白いと思います。)

### 迷信について

迷信というとおかしな宗教が登場してくるのが常であるが、そんな明らかな迷信について今さら並べることがない。それよりも多くの人が真実であるかのように信じ、それが一般的通説のようになっていくことが割合多い。科学的であることを自称する人だって、口程にもなくこの迷信の信者である場合が少なくないのである。これがその適切な例であるとは限らないけれども今は一般に女性の能力は男性にくらべて低いと多くの人は考えている。もちろん公の席ではそんなことは云わないけれど、普通女性の情緒的部分が強調されることはあっても、理数系の才能は男子に劣ると考えられている。これは単なる封建性のなごりであつても根拠はないのである。僕は誰かのようにフェミニストであるとは思われないが、女性の才能の利用はもつと考えられるべきであらうと思う。ソ連では毎年理工科系の大学生の1/3が女性であると言うが、この呉資本主義国はもつと見習って女子技術者の養成に力を入れてもよいだろうと。さらに昔から迷信のつきものとして天才的な人間のことがある。天才と気違いは紙一重といわれ早熟児は将来大成しないようなことはよく言われることだが、これは単なる劣等感又は母性愛などの産物であつて決して真実でないように思う。少数の例を強調して部分と全体をすりかえられたことが今日通説のようになっていく。早熟児としては古来の音楽家や今日ではN. ウィナーの例もあるし、アインシュタインのような天才の例もあるように、多くの早熟児は立派にその能力に充じて大成したり、天才も人間味に立派な人が多かった。色々例をあげればきりがないうだが、迷信というものは人間のちよつとした弱みにつけこむものである。人間がその弱みに気付かない時は一層確固たる固定概念となつてしまうもののようなのである。世間の常識といわれるものの中にも如何にそんなことが多いか。我々は常に色々なことについて再考し、誤ったドグマは追放しなければならないと思う。

(バージエン、エバンス著の「ナンセンスの博物誌」はこのような迷信を非常に皮肉な調子で書いています。)

前回の本誌10号にある4回生からの(現在卒業)C科の研究室の中に、C科の生徒の余り利用しないものがあり、その存在価値を疑うとの意見がみられたが、それに少なからず反駁を感じたのでそのことについて少し考えるところを書きたい。

まず、この意見が非常に身勝手なものであり、一方の口で学向の進歩を喧えながら、一方ではそれと裏腹なことを述べられているように思われる。即ち、C科の学生が利用しないことや、他の研究室が足りないことは、例の研究室の存在価値及びその学向の価値とは何の関係もないことである。しかもC科の研究室は、C科の学生だけが利用すべきものとは、どこにも決っていない。このようなことにも、小さなセフジヨナリズムが感じられるのは、当然相対的なものであって、現在の産業との関係とかだけによって決まるものではない。もちろん、学向が“進歩”ということを獲得するに以上、これにさからうものはその価値は薄れるが、だからといって現在の状態からのみ、あるいは自分のやっていることからのみ他の“進歩”を疑うとなると大それた問題である。しかも、20世紀後半の科学はますます凝まる専門化と同時に、より広い巾が要求されるだろう。このように考えた場合、繊維化学というものも、非常に広い視野からながめる必要があるように思うのである。工学的、理学的、農学的なもの、それにその境界領域と視野はいくらでも広げることが出来る。何も繊維化学ということにこだわらなくともよいと思う。だからあの人が指摘するように、もっと研究室があってもよい、ゼイタクなようだが、ゼイタクは全ての科学の本質的屬性だからである。そのことはとにかくあの意見は全体として価値のとらえ方が思いつめたような絶対性があるようであるが、もっと相対的に物の価値を考える必要がありはしないかと思ふのである。

前回の誤り

P. 54 Q. 31 都合 → 都会  
P. 55 Q. 3 分る → 分子

就取

私は、  
しいでし  
なことを  
どで若干  
もそう簡  
どうして  
んで色々  
リ正確に  
勤めてい  
がそのよ  
いようだ  
る。先輩  
のである  
リ一層都  
宛にどし  
地堅めを  
ところ  
それは昨  
あるもの  
究部で、  
のである  
は「社会  
バランス  
を多くと  
センス的  
革新の花  
パイプで  
から、現

# 就転職案内と

岩崎研究室

## 先輩の行方

松本喜代一

私は、就職シーズン前になると学生諸君から「どの会社へ就職したらよろしいでしょう」とか、「どこが将来性のある会社でしょう」とか云ったようなことをよく尋ねられる。もつともなことで、雑誌や年鑑やパンフレットなどで若干の知識を得た位でそう簡単に決められるものではないし、また誰でもそう簡単に奨められるものでもない。説明会といったものもないのだから、どうしても何かの書籍などに頼るようになる。ところで就職案内書を沢山よんで色々検討するのも一法だが、それ以上に希望会社の生のニュースをより正確に早くキマツチする方法がある。その一つは親類や友人に希望会社に勤めている人があればそれらの人々を利用するのである。しかし、誰も彼もがそのような人を持つとは限らないし、多くの人はそのようなコネを持たないようだ。ではどうすればよいのかと云うと、それは先輩を利用するのである。先輩というのは有難いもので、大抵の場合に後輩を大事にしてくれるものである。それが、同郷出身の先輩とか、同じクラブだった先輩となるとより一層都合がよい。これはと云う希望会社があれば、そこに勤めている先輩宛にどしどし手紙を出して会社の色々なニュースをキマツチし、その希望の地堅めをすればよいだろう。

ところで、就職案内書として割合よい本があるので一寸紹介しておこう。それは昨秋出版された「日本の社会」というベストセラーで是非一読の価値あるものだと思う。1冊200円で安い。この本は日本リサーチ・センター研究部で、客観的にかつ科学的に資料を収集し、分析された結果をまとめたものであるから大体信用してもよいのではなからうか。主な内容は、第一部には「社会を見る目」と題して、人間的要因——経営者と組織、計数的要因——バランスシート、産業的要因——市場と経営戦略、というように分けて実例を多くとりあげ分り易く解説してある。経営学や工場管理などの講義のエッセンス的内容で仲々面白い。第二部には、「会社の迷ひ方」と題して、技術革新の花形といわれる電気機械から、現代の大魔術師といわれる一般化学やパイプで繋がれたコンビナートの石油化学や系列化競争の激しい商争のことから、現代の怪物マスゴミ関係等に至るまで33項目に分けて日本中の主要

会社を網羅し、評価表をつけてズバリ書かれている。その他に会社名索引や主要産業の順位表や旧財閥等の系列図などまであつて仲々多彩である。著者は坂本藤良氏である。

さて、話を本筋に戻すと、若い繊維化学科ですら既に約600人からの良き先輩があるのだから、彼らを大いに利用すべきである。「chain」が繊維化学科の縦の連がりをもたらし為にあるのならば、編纂委員諸君は多忙の中を一層の努力によつて先輩の行方を調査してしかるべきではなからうか。一編集子にこのことを話したところ、早速オ一回の調査をしてほしいとの依頼を受け、何だかヤブヘビになつてしまつたが、一応引き受け下のような表をつくつた。以前にも一寸した調査をしたことがあるが、今回は先輩の卒業年(数字がそれ)と名前を会社別にまとめた。これによつて皆て共にボールを追つた先輩や、山へ行つた先輩らの姿を思い出して、早速コネをつけ、色々なユースを引き出すことに成功すれば、何かと便利かと思う。以下のデータは繊維化学科の同窓会「織化会」の最新の名簿より集めたもので、正会員(卒業生)のみに限つたこと、一部会社や自営、高校、中学等を省略したり若干の異動、不明などのあることも承知されたい。(敬称略)

#### 1. 電気機械

日立製作所(西川<sup>35</sup>)

住友電工(太田<sup>34</sup>, 宮内<sup>37</sup>)

三菱電機(塔合<sup>31</sup>)

#### 2. 造船

三菱造船(林<sup>36</sup>)

新三菱重工業(武田<sup>25</sup>)

#### 3. 一般機械

橋本チエーン(小西<sup>36</sup>)

大阪金属工業(外村<sup>19</sup>, 杉野<sup>34</sup>)

#### 4. 鉄鋼金属

日本製鉄(小森<sup>20</sup>)

大阪チタニウム(清水<sup>25</sup>)

#### 5. 石油

丸善石油(岩井<sup>25</sup>, 三宅之<sup>35</sup>, 白尾<sup>35</sup>, 今井<sup>36</sup>, 北村<sup>36</sup>, 柏木<sup>37</sup>, 築山<sup>37</sup>)

出光興産(水谷<sup>34</sup>)

#### 6. 紙・パルプ

王子製紙(若松<sup>22</sup>)

十策製紙(吉住<sup>22</sup>)

三菱製紙(有田<sup>19</sup>, 奥村<sup>36</sup>, 荒瀬<sup>37</sup>) 紀州製紙(梅本<sup>32</sup>)

聯合紙器(今来<sup>33</sup>)

山陽パルプ(吉田公<sup>36</sup>, 中村<sup>37</sup>)

興国人絹パルプ(片岡<sup>28</sup>, 高木<sup>31</sup>, 岡村<sup>33</sup>) 巴川製紙(長谷川<sup>31</sup>)

日本紙業(中島<sup>23</sup>) 三協製紙(山下<sup>23</sup>) 東海パルプ(西川<sup>23</sup>)

#### 7. 織

東洋紡

鐘紡

日紡

日東紡

倉敷紡

呉羽紡

富士紡

八光紡

東洋レ

帝国人

旭化成

倉敷レ

三菱レ

日本レ

東邦レ

新日本

片倉工

日本合

日本バ

中国染

神栄製

呉羽化

日本工

京都織

日本フ

東洋ク

## 7. 織 維

- 東洋紡 (朝田 26, 渡辺 33, 松井 35, 谷口 34, 木田 37, 鶴飼 37)  
鐘 紡 (山下 20, 足立 29, 内本 25, 小川 25, 大西 36, 西久保 37)  
日 紡 (北村 23, 三好 37, 井浦 32, 川喜多 35, 真多 37)  
日東紡 (北川 24, 森田 24, 青木靖 36, 笹倉 37, 内河 37)  
倉敷紡 (福井 17, 前田 32, 沢 33, 松本 35, 海野 37)  
呉羽紡 (小森 19, 安次 24, 吉田 27, 御原 33, 小川 34, 和田 36, 岸田 37)  
富士紡 (鈴木 33) 大東紡 (山田 24) 興和紡 (佐山 32)  
八光紡 (内田 26) 共立毛糸紡 (東 23) 並江絹糸 (高橋 32, 中根 35)  
東洋レーヨン (田川 17, 辻 17, 氏田 23, 山岡 23, 北原 24, 坂田 24, 中野 24,  
堀 24, 安田 24, 鈴鹿 26, 藤吉 28, 矢向 30, 町田 31, 浅見 32,  
安本 32, 岩崎 33, 中村 33, 島山 34, 福井 35, 岡松 35, 青木寿 36,  
山川 36, 荒谷 37, 市村 37, 近藤正 37)  
帝國人絹 (下倉 22, 森本 22, 赤木 25, 北村 32, 山田進 35, 阿井 36, 名取 37)  
旭化成 (栗木 31, 田中 32, 勝山 33, 伊藤 35, 片山 37)  
倉敷レイヨン (植田 25, 松尾 26, 吉村 31, 斉藤 36, 小原 36, 三宅 37)  
三菱レイヨン (木村 25, 片岡 32, 小林 37)  
日本レイヨン (上垣 22, 栗田 23, 西尾 23, 井上 25, 大淵 28, 原 30, 田川 31,  
植嶋 31, 林 32, 内藤 33, 内海 33, 藤井 34, 広瀬 35, 山本泰 36,  
市原 37)  
東邦レーヨン (田中 17, 小谷 24, 藤本善 25, 若槻 33, 山内 34, 加宮 35,  
吉田実 36, 藤田 37)  
新日本窒素 (沢田 36, 畠岡 37) 住之江織物 (西田 20, 木下 34)  
片倉工業 (松下 17) 樋口メリヤス工業 (柳田 17)  
日本合成纖維工業 (市川 20, 山口 26) 甲陽纖維 (向 24)  
日本バイリーン (荒木 26) 矢代仁織物 (田口 26)  
中国染工 (野村 26) 湊川メリヤス (中村 26) 東北製綿 (佐藤 22)  
神栄製糸 (長島 22) 日本アセテート (西尾 22) 旭ダウ (沖田 35)  
呉羽化成 (山村 25, 遠藤 33, 飯田 36, 吉井 37) 京阪加工 (高崎 30)  
日本エクスラン (松村 31) 敷島カタン (栗山 25)  
京都織物 (沢村 23) 大阪染工 (永海 25, 増田 25)  
日本クロス (植村 24, 橋本 30, 安田 30, 中野 32, 足立 33, 小西 34,  
山田博 35, 高橋 36, )  
東洋クロス (井尻 34, 下村 35)

竹仁染化 (有吉 20, 橋野 20, 菅井 29, 寺田 29, 岡本 31)  
関西帆布化学防水 (高木 25, 河内 31) 石野染工 (荻井 25)  
オーレース (小林 26, 杉村 27, 田中 29, 河村 30, 小林 32, 久山 32, 藤木 33,  
藤田 34, 金村 34, 古田 34, 吉川 34, 岡田 36)

小沢染工 (水谷 25) 大和川染工 (川端 29)  
旭染工 (上柿 29, 肥後 30)  
岩戸染色整理 (畑 31, 野村 34)  
東海染工 (岩見 33) 丸和染織整理 (亀洲 33)  
倉敷織維加工 (堀田 26) 富士帽子工業 (篠田 36)  
富山煮網 (玄島 30) 秦東製網 (井口 32)  
森下製網 (西原 30, 山下 32)

8. 一般化学

住友化学 (藪内 34) 長浜樹脂 (秋山 35, 山本貞 36)  
三菱化学 (西堀 34) 松谷化学 (稲野 26, 近藤 34)  
三井化学 (新居 28, 江岡 37) 日燐化学 (佐藤 29)  
東洋化学 (近藤 36) 製鉄化学 (木村 30)  
日産化学 (野田 35, 堀江 36, 早川 37) 明成化学 (松浦 26, 田中 35)  
積水化学 (相根 24, 藤本健 25, 高橋稔 34, 玉置 34, 矢倉 35, 佐野 37)  
田辺プラスチック (辻 26, 清水 36) 高分子工業 (沢田 26)  
岐阜プラスチック (大松 22, 久保田 22, 片山 28)  
大塚化学薬品 (内原 22) I. C. I. (中村 26, 都志 28)  
武田製薬 (近藤孝 37) ペトロケミカル (本多 25)  
東京リノリウム (吉野 36) 坂田インキ (上野 34)  
大同化成 (山根 22) 整水工業 (岩見 23)  
紀和化学 (小倉 26) 東京フアインケミカル (三木 28)  
住友ベークライト (北本 25) 東京グローリア (坂口 28)  
日本ライヒホールド化学 (宮川 28, 達川 28, 古沢 29, 森 29, 福島 32)  
日本ミネソタ (福田 30, 坂元 31, 仙波 31, 山名 37)  
大日本インキ製造 (小牧 29, 松田 31, 村田 33, 山内 36)  
京津合成化学 (山脇 29) 日本染化 (吉田 30)  
エシロ化学 (芦田 30, 山崎 32, 小林 34, 渡辺 35)  
扶桑化学 (小野 30) 大東化学 (鬼頭 31) 六成化学 (柳瀬 31)  
山田化学 (中井 32) 昭和工業 (井上 33)  
宇部興産 (寺田 32, 国本 37) 鐘ヶ淵化学 (栗岡 33, 高橋 35, 安本 36)

三京化成 (藤井 23, 荒田 26, 世古口 32)

高分子化学 (小坂 34, 森岡 35, 窪田 36) 大和ポリグラス (渡辺 25)

中日化学 (永山 47) 東洋メタライジング (藤村 32)

日本合成化学 (岡村 25, 徳山 36)

愛知セロファン (塚田 33) 大日本セロファン (川本 35)

## 9. ゴム

日本ダンロップ (松井 19, 吉岡 33) 共和ゴム (西島 25)

ブリジストンタイヤ (浅井 28) 大津ゴム (和泉 28, 城口 34)

大機ゴム (近藤 28) 阪東調帯ゴム (松下 33)

三ツ星調帯ゴム (難波 34, 池本 35)

## 10. 油脂、塗料

花王石鹸 (菊見 25, 安ノ井 26, 井上優 29, 堀 33)

オー工業製菓 (塚本 22, 浜村 23, 北川 26) 三洋油脂 (川合 32, 角谷 35)

一方社油脂 (老松 30) ライオン油脂 (奥村 32, 岡崎 32, 小林 35)

日本油脂 (星野 32, 道狭 34, 柴田 35, 山崎 36, 木下 37)

光陽塗料 (吉本 28, 館 31) 神東塗料 (松尾 35)

日本ペイント (山崎 32, 高橋宏 34, 林 35)

関西ペイント (高田 34, 井肉 35, 山本省 36, 三辻 37)

久保孝ペイント (田中 28, 石川 32, 林 33, 岡本 34, 赤山 35)

## 11. 精糖、醸造

新光製糖 (須佐見 26) 新光甜菜糖 (大槻 26)

キリンビール (中川 19, 久保井 20)

協和醗酵 (藤波 25)

## 12. 商 事

三菱商事 (依藤 33, 片山 36) 三木産業 (木村 19)

丸紅飯田 (二宮 30, 梅原 34, 川端 37) 徳永貿易 (大森 26)

伊藤忠商事 (内藤 28) 大阪合同 (裏谷 23) 日綿実業 (土井 35)

明成商会 (寺岡 28) 東洋綿花 (渡辺 36) 中村産業 (柴山 28)

日商 (奥野 34) 日本トレーディング (山口 29, 荻野 34, 坂下 35)

安宅産業 (三木 35) 日光商事 (青木 30, 井上 31)

岩井産業 (井上道 29) 稲畑産業 (山口 31)

三共生興 (山内 32)

## 13. その他

住友林業 (吉田 24) 高分子化学刊行会 (今城 23)

- 繊維工業指導所（今井(22)） 奈良県庁（齋田(20)）  
 防衛庁調達本部（辻(24)） 奈良県工業試験場（山口(29)）  
 神戸税関（深沢(24)） 島根県工業試験場（錦織(29)）  
 京都染色試験場（長峰(22)） 岐阜県庁（青木(29)）  
 京都繊維製品検査所（内本(23)、山嵐(24)） 京都府庁（萱島(23)）  
 京都市水道局（森脇(22)、神村(31)） 大阪府庁（横山(22)）  
 大阪工業技術試験場（須本(23)、山下(23)） 大阪府工業奨励館（安田(25)）  
 織物染色協会（安達(28)、稻垣(30)） 繊維工業試験場（平佐(34)）  
 日本化繊検査協会（川那部(32)） 日本交通（高木(28)）  
 京都大学（玉村(21)）  
 京都工芸繊維大学（林屋(20)、高橋(24)、内藤(25)、麓(26)、山崎(28)、松本(29)、  
 成田(30)、北尾(33)、佐津川(34)、鈴木(36)）

#### 14. 大学院学生

- 京都大学（前川(35)、清水(35)、朱(36)、富川(36)、吉田周(36)、川崎(37)、岡崎(37)、  
 佐藤(37)、竹田(37)、上野(37)、山元(37)）  
 東京工業大学（藺(37)）

以上で先輩の紹介は終るが、どうか学生諸君もよき後輩として、着々築いた先輩の業績をけがさぬよう、一致団結して、よりよき学園の発展に貢献しようではないか。

### 織化不道德講座

by X. Y. Z

1. くわえ煙草で教室や廊下をうろつき廻るべし — エーカッコできる。火事にでもなればもうけもの。
2. 危険な菜岳は乱暴に扱ふべし — びくびくしては実験なんぞできぬ。
3. 廊下や教室は下駄でのし歩くべし — 快い音で実験の能率は上るだろう。
4. 実験衣は大いに落書きすべし（但し扇を忘れぬこと） — 芸術的才能が認められるばかりでなく他人の目をうるおす。
5. 実験器具は破壊すべし — 何やらと実験器具は新しい程良い。
6. 目上の人には肩で挨拶すべし — 一層親密になるであろう。
7. 中庭は掃除すべからず — 我々は自然を愛護すべき義務がある。
8. 池のゴイには十分に餌を与うべし — 徹夜で実験する時のため。
9. 他人の部屋へ入る時はノックすべからず — スピードをモットーとすべし。
10. 名札つけるべからず — いざという場合お互いに都合も悪からう。“先生おしっこ”を思い出す。

当研究  
 ミノ酸構  
 か卒論生  
 々の方か  
 「蛋白織  
 室も昨年  
 卒論生一  
 次に当  
 長えも見  
 で助教授  
 と穩健で  
 雄の四人  
 研究室  
 い。  
 最後に  
 とが目標  
 し全員が  
 （後記  
 運悪く  
 拙文で紙  
 良く紹介



# 研究室紹介

## 貴志研究室

当研究室は昨年まで「蚕糸化学講座」と名も示す如く栄養と絹蛋白質のアミノ酸構成量の変化すなわちアミノ酸の分析が研究の主体であった。その為か卒業生には敬遠されC科には縁遠い所と感じられていた。しかし今年は我々の方から研究テーマを注文し先生方もこれをよく理解して下さい講座名も「蛋白繊維講座」となり *polypeptides* の合成の研究をすることになり研究室も昨年とは打って変わり大変明るい和やかな活気に満ちた雰囲気に入れ卒業生一同意欲を燃やし大いに頑張っています。

次に当研究室の構成メンバーを紹介します。

長えも見せず研究に励んでいらっしゃる貴志教授を筆頭に当研究室のホープで助教授に昇進され直接我々を指導下さる武内助教授、相談相手の竹田技官と穏健で明朗な諸先生方それに上田裕正、町田忠太郎、松下真智子、森山文雄の四人の卒業生より成っている。他にS科、I科の卒業生も少数いる。

研究室の雰囲気は気楽で伸々と自由であり少人数であるためまとまりがよい。

最後に我々の研究は *silk, wool* の性質を持つ優秀な繊維を造り出すことが目標であり当貴志研究室が今までの研究を基礎に大きく発展すると確信し全員が励んでいる。

(後記)

運悪く研究室の紹介の原稿を書くことになったので厚かましくも止むなく拙文で紙面をけがさせて頂いた。勉強不足や研究室に關する知識の浅いため良く紹介出来なかつたが不審な点があれば直接研究室の方へ来て頂きたい。

(森山)

## 林屋研究室

繊維化学の女性諸君、正絹仕立の十二一重をお召し下さい。平安時代の美しき乙女がその前には大判小判も惜しげなく出して、そつとその感触に酔いしれた。さらびやかなそしてチヨツピリ渋い絹織物をふんだんに使ってお作り下さい。お金のことは心配御無用、貴女のポケットマネーからほんの少し御投資下さればそれでOKです。でもそう慌てずに *for a while* お待ち下さい。今私達の研究室でこの絹を試作中なのです。もう一息すぐに出ましますから。

さて、ふざけたP.R. はこれぐらいにして、もう少しまじめにお話ししましょう。今年おやめになった赤村先生は全くいい所に目をつけられたものと感心させられます。“蚕はなぜ桑の葉を食べるか”それがこの研究室の長年の課題だったのです。“簡単じゃないか、蚕は桑が好きだから食べるのさ、おれが餌を好きなのと同じだ”なんて、そうそうあっさりかたづけられてはこれへの答にしかありません。なる程、“蚕はなぜ桑の葉を食べるか”これだけではいくら正解を出してもせいぜい学問的な意義しかないかもしれません。しかしもう一度 *for a while* お待ち下さい。私が文頭で“絹で作った十二一重をお召し下さい”とP.R.した夢のような話を現実の世界へ持って行く鍵が実はこの一見つまらなさそうに見える向題の中に隠されているのです。そして、この向題もほぼ解決されて来ました。浜研が長年かかって得た大きな成果です。さてもう一度“蚕はなぜ桑の葉を食べるか”説明しましょう。このことを、蚕は桑葉中の3つの *factors* i.e. 蚕を引きつける役目をする *attractant factor*、蚕に噛む行動を起させるオ2の *bitting factor*、そしてオ3に連続食下を起させる *factor*、これが桑の中にあることが蚕をして桑を食べさせる所以なのです。事実この3つの *factors* を添加しておけば蚕は桑でなくたって大豆みたいなものにでも食欲を見出すのです。

これでおわかりでしょう。冒頭にかかげた文面の意味合いが、そうなんです。桑葉しか食べなかったぜいたくな蚕を他の安い人工飼料を使って町の工場で年中、しかも大量に飼うことが可能になったのです。この工場からはやがましいモーターのひびきも、いやな薬品の臭いももれてきません。小さな

箱の中で  
が昔もな  
れが合成  
としてい  
す。今の  
まだ未発  
です。そ  
のです。

所で先  
よう。先  
アイトマ  
何だかど  
先生、そ  
んと、西  
の名誉顧  
最後に  
竹迫

登川

広瀬

藤田

箱の中で、蚕が静かな眠りについたとき、美しい光沢と、風合を持った絹糸が音もなく生れ出て来るのです。合成繊維が最後に目指している絹繊維、それが合成とは違った立場に立って、もうすぐ私達の研究室から生まれ出ようとしているのです。後残された課題に蚕の増進物質と栄養素の問題があります。今の所始めから人工飼料で育てた蚕は普通程大きく育ちません。そこでまだ未発見の物質で蚕の増進剤の栄養源になるものはないかと目下研究中です。そしてこの仕事に林屋先生、内藤先生が懸命の努力をされておられるのです。

所で先生方の名前が出た所で、私達研究室のスタッフを紹介しておきましょう。先ず筆頭はピリリとチヨツピリからいが、なかなか冗談もお好きなフアイトマン林屋先生、次がとてつもなくやさしくて、いつもニコニコ、それでいて何だかとても甘いロマンティックな幻想の世界を夢みておられるような内藤先生、それから両先生の重要な片腕として研究に余念のない研修生の松浦さんと、西田君、それにもう一人去年で停年退職された浜村先生を私達研究室の名誉顧問としてでも掲げておきたいと思ひます。

最後に私達卒論生4名の紹介とその研究テーマを記しておきます。

竹迫雄司

*phenyl ketene* の合成。先づ第一階はこのものの合成ですが、これができたらこのものと各種 *alcohol* と反応させ、反応生成物の *m.p.* *etc.* の諸性質を測定します。この *data* は、*alcohols* の物質確認に関する一資料となることと思ひます。


登川壽夫

ヘキサデシルケテンダイマーの反応性について

- a) アミンと *diketene* との反応、
- b) P.V.A. と *diketene* との反応、
- c) *nylon* と *diketene* との反応、

時間があれば *cellulose etc* との反応もやりたいのと云。

広瀬節子

*Resorcine* と *Diketene* から *chromone* 核の合成。一年間でやりとげられるかどうかかわからないが *chromone* 核ができると、2-位の  $\text{CH}_3$  を  に置換することによってフラボンとなり、これはフラボン核の新しい合成法になるとのことです。

藤田宏哉

桑葉中より発見された新物質の構造を確認することとその合成、及びこの物質の一連の誘導体の合成、この物質が当たれば蚕が大きく育つかも知れません。誘導

体を作るのは、誘導体の中に新物質以上にその効果の強力をものがあるかもわからないからです。

この他平論生として、Fから2名、Sから1名加わって皆んなで楽しくやっています。こないだ岩研の松本さんが来られて、私達の研究室を繊維化学教室別館と呼んでおられました。まさしくその通り、モダンな繊維化学教室の斜向は、どっしり地を踏みしめ、幾年も風雨にたたかれて来た古い建物別館には、ヤがてその名にふさわしく緑のつたが建物一杯にはい拡がり、夏には涼しい風が緑をついて吹き込むようになるでしょう。

そして部屋の中はいつも家庭的な楽しいふんいきが一杯にみなぎっています。どうぞ気軽に遊びに来て下さい。浜研特製のおいしいお茶も皆さんの訪向を待って居ります。

## 相宅研究室

これから私が書く研究室紹介は僅か二週間の瞥見にすぎないから、そのつもりでよんでいただきたいと思う。

相宅研究室を一言にして言えば“矛盾”につきる。

オ一に研究費である。大学よりの研究費は年固わずかであるが、雑誌会のリコピー感光紙代だけでも年間その二倍を上まわる。

オ二にスタッフである。本当に平論の効果を上げようとするれば、スタッフ一人に学生二人以下でなければならぬのは華実である。しかし本研究室は相宅、北尾西先生だけであり、学生は十三人もいる。けれど研修生が十三人いるため我々には一人に一人のスタッフをもっていて、相宅、北尾西先生は余る勘定になる。即ち最も充実せざる研究室であり、最も充実した研究室でもあるわけである。

オ三に器具、機械についてもいえる。先生の言によれば、機械のない研究室であるが、機械の並んでいることが御存知の通りの多数である。即ちこれは会社からの借物である。たとえ永スの中でも、しかし我々はこの一年使つてつぶすだけであり、あればいいので、どこのものであろうと関係はない。

オ四に場所のないことだ。これは外部との矛盾である。繊維化学科全体としては、場所不足というわけではないから一つの矛盾として指折ることにできよう。

又相宅研究室は工学部の研究室である。いかなる結果を生むかが一番大切であり、その過程はその次に大切なのだ。勿論異論はあろうが、我研究室はかくあるのだ。

そして又相宅研究室は失敗を尊ぶ研究室でもある。化学とは失敗の中に存在するのだ。(しかし、二度同じ失敗をすると叱られること保障つき)。だから我々は安心して失敗をくりかえしているわけである。これが又矛盾の一つと言えるかもしれない。

かかる永遠に交わることのなさそうな平行線の交点が相宅先生その人であるといえる。ここからは針の言葉も飛出す原因も生れる。“学生とはエネルギーの塊で、考えることのないものだ。”etc.

次に卒論生のテーマを列挙する。

井上 正	(班 長)	P.P.のハロゲン化
池田 弘	(写 真 係)	連続重合
岡崎誠之	(雑談会係)	ポリカーボネイト紡糸と物性
川端誠治	(掃除園芸係)	ポリペプチド合成
喜多政夫	(アミダ係)	接 着
坂下信雄	(紫 岳 係)	高分子物性(球晶)
天野敏実	(コンパ係)	P.A.N紡糸
千葉 明	(函 書 係)	放射線高分子
原 隼	(リコピー係)	テトロン真空重合(共重合)
平向敏郎	(リコピー係)	パール重合
堀内勝宏	(リクリエーション係)	ウレタンフォーム
松本 正	(器 具 係)	ポリエーテル紡糸
分部好孝	(会 計 係)	高分子物性(流動)

我々の日常は又小学校の教科書に似ている。よく遊び、よく寝、よく食いそしてよく叱られる(これは教科書にない)。

遊び道具には事欠かない。野球道具一式(審判の面まであり)ピンポン用具一式、テニスラケットは軟庭、硬庭共、その他弓道具、山道具一式。食う方も皆んな元気だ。アミダクジを引いて先生に買いに行かせる位朝飯前である。

これから一年我々は、ムダに紫岳を流し、多いに器具を割り、大いに遊び食い、そして大いに叱られて過すつもりである。

# 岩崎研究室

新入生にとって研究生はまだなじみが薄いが、二回生になると岩崎教授の「有機工業化学I」の講義があり、三回生では岩崎研究室における「化学工学実験」があり、実験・計算・レポート提出と忙しい思いをし、又「繊維実験I」では本館南側の工場でアルカリと油とサビにまみれてパルプからビスコースレーヨン紡糸までの楽しい実験がある。

我々の入った岩崎研究室においてはセルローズ、積分重合反応、界面活性剤等に關する研究及び合成樹脂、樹脂加工、*wash and wear* 等々相当巾広い研究が行なわれており、岩崎教授を頭に後藤助教授、高橋助手、松本技官の良き指導者の下に *Able Engineer - Gentleman* の卵たる卒論生、研修生、聴講生一同は勉学に、実験に、運動に毎日励んでいる。

次にメンバーを紹介する。

繊維化学実験室—後藤助教授—

- 生熊 (F科卒論生) 蛋白纖維の *wash and wear*
- 熊谷 ( " ) 捲縮絹糸の工業化
- 原 ( " ) *wool* の増量
- 水田 ( " ) *silk* の増量
- 荻坂 (研修生) 洗濯に關する研究
- 川崎 ( " ) 洗濯に關する研究
- 清水 ( " ) *silk* の *wash and wear*
- 西田 ( " ) 合成糊料について

ビスコース—高橋助手—

実験室

- 木下 (C科卒論生) パルプ廃液に關することなど
- 大塚 ( " ) セルローズの架橋
- 寺田 ( " ) セルローズのグラフト重合
- 三村 (聴・研) 高分子溶液の粘弾性
- 綾織 ( " ) ビスコースについて
- 高須賀 (研) 合成糊料
- 岡田 (初) ( " ) 樹脂加工

反応工学—松本技官—

実験室

- 井上 (道) (C科卒論生) AN の重合度に關する積分重合反応

- 大野 (C科卒業生) アフリルアミドに關する積分重合反応
- 村田(南)( " ) ポリエステルに關する積分重合反応
- 上田(聰)( " ) エポキシ樹脂の合成とその利用
- 大洞 ( " ) エポキシ樹脂の合成とその利用
- 内山 ( " ) テレフタル酸の新合成法
- 高田 ( " ) 界面不活性剤
- 筒井 (研修生) 纖維・樹脂の鑑別法
- 渡辺 ( " ) 纖維・樹脂の鑑別法
- 高屋 ( " ) 纖維製品消費科学
- 長瀬 ( " ) 纖維製品消費科学
- 特別実験室 — 岩崎教授
  - 有松、岡田(憲)(聴・研) 粘体の流れ
  - 村田、倉本、鈴木( " ) 芒硝の苛性化
  - 大島、吉田、内記( " ) 化繊の改質
  - 竹村 ( " ) 化繊の改質

岩研では三回生の終りにテーマを決め実験の引継ぎを行なつて四月の初めまでに文献調査、実験計画を済まし四月に入つてすぐに実験に取りかかるのが原則になつていて相当にしぼられる(但し原則である故例外もありこの部類に屬する連中も多いのである)。このように書くと岩研では実験ばかりやっているとと思われるがそうではない。(先日オー一回リフレッシュンとして)大原方面にハイキングに行き途中雨に降られたため橋の下で豚汁に舌鼓を打ち駄洒落をとばして楽しい一日を過ぎた。又教室においては連日アミダをやり破産しそうになったり、飯を炊き、サンマを焼いて変な匂いを漂わすようなことが時々ある。運動も盛んで御大岩崎先生はかつてヨツトの名手であつたし、後藤先生は卓球部の監督兼取員送手として活躍、高橋先生は山男であり、松本先生は準硬式野球部の監督であり、取員野球部のエースである。学生の方にも野球、バレー、弓道、柔道などのベテランがそろっている。

(附記)

岩崎教授は本年四月オランダのアムステルダムにおけるオ九回纖維化学者染色技術者連盟国際會議に東大永井教授と共に日本代表として出席のため渡欧されました。本学部最初の国際級の先生を擁し、先生の名声をけがさぬよう我々一同は大いに努力しています。

## 町田研究室

再び春がめぐつて来た。研究室は再び息を吹き返す。生ぐさい青葉のような未熟ではあるが捲らつとした連中が町研にのりこんだのは4月に入ってまもない頃である。

研究室の机に一心に向う中年の紳士、我々はそこに真の町田先生を見出した。あえて“真”とことわつたのは他にもない、二、三回生の講義を通じてでは見られなかった人間“町田先生”を我々はそこに見出したからである。町研には年来町田先生の人गरが研究室全体に浸透して自由でのびのびしたふんいきにみちみちている。広い意味での学問研究をめざすものにとっては恰好な研究室である。進んで若輩のぼくらの仲間に加わり、ぼくらの考えを知り話し合おうとされる先生、たまの休日を棒にふつてもぼくらのハイキングに加わつて下さる先生、きびしくともその一言に必ず寛容をもって接しられる先生、ぼくらは町田先生に限らない信頼と親愛の感をよせている。

町研にとって鬼に金棒というべき存在内野先生は昨年一年間アメリカのパーデュウ大学に留学の後帰国されてまもない、内野先生には研究者としてのきびしい態度が一本筋金として入っており、不勉強な学生は足元にも近づき難い、といつてもゴチゴチの研究者というわけではなく暮もやればバドミントンをもつてしては学生二人がかりでもかなわぬという多士文文ぶり、常に外面上きびしくとも、内にやさしき心をひめたる内野先生は町研のケン引車として日夜研究に学生の指導にいそしんでおられる。

町研のスタッフはその他、沈着冷静、人のよさそうな成田さん(助手)、温厚堅実学生向に人望厚い方能送手の稻野さん(研修生)そろって研究熱心の西川、岡根研修生のみなさんがおられる。今年のニューズは京都女子短大を卒業後、新たに研修生として来られた杉本さん、タイピストとしても最たるもので村田さんと共に町研の紅二兵をなしている。

さていよいよぼくら学生陣はとにかく何でもやろう、見てやろう、くいついてやろうという典型的積極型、その反面不勉強は百も承知だから基礎的な勉強もおさおさおこたりない。研究室は巾広い趣味と教養の中に慮ぬけの笑いでパイである。それに又よくもアミダの好きな奴が集つたと思われる位

アミダは  
う若人の  
を誇る町  
今年の  
る分野に  
最後に卒

ポリ  
メタ  
ポリ  
ポリ

酢酸  
アク  
スチ  
スチ  
デイ  
デイ



アミダはお盛んである。研究室の片すみでのダベリング、それは明日をになう若人のはつらつとした姿以外の何ものでもない。アカデミツクなふんいきを誇る町研はかくの如く意義ある日々を送っている。とこかく我々にとって今年の一年は大学生生活の総決算、学問研究の面に、人間形成の面に、あらゆる分野に手足をのばしてやれるだけやっておきたいと日夜はりきっている。最後に平論生の顔ぶれとテーマを紹介して町研の紹介を終わります。(平野記)

ポリアクリルアマイドのホフマン分解	片瀬 憲一
メタアクリルアマイドと酢酸ビニルの共重合	岡田 卓二
ポリアクリルアマイドのマンニツヒ反応	田中 逸雄
ポリアクリルアマイドとカルボニールグループ との反応について	芦田 秀雄
酢酸人絹へのアクリルアマイドのグラフティング	中村 忠夫
アクリルアマイドとマレイン酸の共重合	井上 修次
スチレンと無水マレイン酸の共重合とその応用	天辰 健治
スチレンと酢酸ビニルの共重合とその応用	村田 紀子
デリアルデヒドスターチの反応性について	井伊 国裕
デリアルデヒドスターチの反応性について	平野 晶三

### 編集部紹介

4回生	木下 素志	2回生	井上 隆之
	沢野 敏美		川村 了一
3回生	有松 利雄	1回生	鴉野 高資
	金井 政洋		小川 信夫
	植本 勲		宮崎 能久
	堀江 玄		

## 編集後記

年を重ねて“Chain”も創刊から五年目の春を迎えました。

三月に卒業生を追出し、四月には新入生を歓迎して、我織化教室も一年の若返りのような感じがします。

例年の如く“Chain”の新年度号は研究室紹介で始まります。

たいがいの人にとっては大体ものを書くということは、少なからず臆劫です。

友達等と何か話し合ったり、何か読んで、或いは何事か経験して書いてもいいなという気は起っても、いざ筆をとると、どのように書き始めたらいいか迷って、結局は、又この次にということになってしまい勝ちです。

又こんなことを言ったりしても結局なんにもならないだろうと思ったり。冷静に考えれば考える程、子供じみた馬鹿げたことに思われるのでしょうか。

即ち冷静さがそのまま消極性に結びつくのでは一寸残念な気がします。

あの頃にこんな事を言ったのかと、後になっても何か懐しい気持がするのではないのでしょうか。

たまには先生方や研究室諸子の研究の或は高分子の紹介でも出ることを期待しています。或いは雑感などでも。

一、二回生諸子のバラの意見も言の外結構だと思います。(編集子)

## 原稿募集

内容…機内紙としての目的に適するものなら何でもよろしい。

形式…自由(原稿用紙には横書きで題字と姓名の欄を五六行とること)

締切…6月25日(次号に掲載のためには、特に期限はありません)

受付…学生委員又は編集部員(原稿用紙入用の場合には編集部員に)

(なお表紙のデザインも歓迎致します)

次号発行予定—7月上旬

我々繊維化学科生が共通の話し合いの場を持ちお互いをよりよく理解し繊維化学科の発展のため何々のエネルギーを結集すべききっかけをつくるために

Chain No.11

発行日	昭和37年5月	日
発行者	京都工芸繊維大学繊維化学	
印刷	北斗プリント社	TEL⑦0231
編集	繊維化学科 chain 編集部	
編集代表	金井政洋	

こと  
せん  
こ)

繊維  
めに